

13 『彼の背中の小さな翼』 真柴あずき

○ジャンル／ストレートプレイ

○ストーリー／イラストレーターの芝山かさねのもとに、父・颯介が亡くなったという知らせが届く。颯介は売れない画家で、25年前に家族を捨てて出ていった。かさねには父との思い出がほとんどなく、消息もまったく知らなかった。荷物を引き取るため、姪・理衣と一緒に颯介が住んでいた家を訪ねるかさね。すると、見知らぬ少年・優太が二人を迎えた。優太には身寄りがなく、1年前から颯介と共に暮らし、絵を教わっていたらしい。優太の話を通して、少しずつ颯介の人となりに触れていくかさね。ところが、そこへ優太の兄だと名乗る男が現れる――

○出演者／男4＋女2 計6

○上演時間／110分

登場人物

芝山かさね

(イラストレーター)

我孫子理衣

(かさねの姪・大学生)

芝山颯介

(かさねの父・画家)

一宮優太

(颯介の同居人)

一宮拓己

(優太の兄)

大網信太郎

(網元)

七月一日昼。荻窪にある、芝山かさねの部屋。我孫子理衣が立っている。

理衣

その人は、私にとって、存在していないのと同じだった。どこで何をしているのか知らなかったし、そもそも、生きていくかどうかどうかさえわからなかった。子供の頃、母や叔母に、何度か尋ねたことがある。その人がどんな顔だったのか。どんな話し方をしたのか。返ってくるのはいつも、『よく覚えてない』という答え。次第に私は、その人を話題にしなくなり、思い出す回数も減っていった。思い出すという言葉は、ちよつとおかしいかもしれない。その人と私は、一度も会ったことがなかったのだから。

そこへ、かさねがやってくる。動きがぎこちない。

かさね

びっくりした。

理衣

おはよう。

かさね

理衣、いつの間に来てたの。

理衣

三十分ぐらい前かな。

かさね

来る前に電話してって、いつも言ってるのに。

理衣

したよ、何度も。(紙袋を取り上げて) はい、これ、差し入れ。私がバイト

してるパン屋の新作。

かさね　　ありがとう。(手を伸ばそうとして) いたたたた。(腰を押さえる)

理衣　　どうしたの、かさねちゃん。

かさね　　ちよつとね、腰が痛くて。

理衣　　働きすぎじゃないの？　　どうせ昨夜も、寝ないで仕事してたんでしょ。

かさね　　まあね。今日、大学は？

理衣　　今日から夏休み。それより、これ。(封筒を差し出して) 玄関のポストに入ってたよ。

かさね　　(受け取って) 速達？

と、どこかから、携帯のバイブ音。理衣が自分の鞆から携帯を出す。

理衣　　(携帯を見て) 私じゃない。

かさね　　(周囲を見て) 私、携帯、どこ置いた？

理衣　　知らないよ。

かさね　　枕元にもなかったんだよね。

理衣　　(周囲を見て) あ、この中じゃない？

理衣が、椅子に置いてあったかさねの鞆を取り上げ、かさねに差し出す。かさねが中から携帯を取り出す。と、バイブ音が止まる。

理衣　　惜しい。

かさね　　(携帯の画面を見て) 誰、これ。

理衣 何？
かさね 知らない番号。セールスかな。

再びバイブ音。

かさね (見て) また同じ番号だ。

理衣 出してみれば。新しい仕事の依頼かもしれないよ。

かさね え？

理衣 ほら。花見川先生から、初めて表紙を頼まれた時。知らない番号だったから

無視しちゃって、すぐ後悔したんでしょ？

かさね あんた、よく覚えてるね。

理衣 ほら、切れちゃう前に、早く。

かさね (出て) もしもし。

遠くに大網信太郎が現れる。携帯電話を持っている。

大網 もしもし、芝山かさねさんの携帯ですかね。

かさね はい、芝山ですが。

大網 どうもはじめまして。勝浦の大網信太郎と申します。実緒子さんとは、もう

お話をされましたか。

かさね は？

大網 実緒子さんから、お電話があったと思うんですが。

かさね 姉からですか？ いいえ。

大網　　そうですか。では、手紙は読まれましたか。速達で送ったんですがね。
かさね　ちよつと待ってください。（理衣に）その手紙、開けて。

理衣　　いいの？

かさね　（頷いて、電話に）もしもし。手紙ですけど、たった今、受け取ったところ
なんです。だから、まだ読めてないんです。
大網　　ありや、そうですか。困ったな。

理衣が封筒を開ける。中から便箋を取り出して、かさねに渡す。

かさね　（電話に）どういったご用件でしょう？　電話では駄目なんでしょうか？

大網　　そうか。今、話せばいいのか。なぜ気付かなかったんだ。

かさね　お願いします。

大網　　では。芝山颯介さんが、一月前に亡くなりました。

かさね　……

臍臓ガンを患っておられたんです。それがわかった時にはもう、かなり進行
しておりました。葬儀などはもう、私らの方で済ませました。すぐにでもお
知らせしたかったんですが、お二人のご住所を調べるのに時間がかかりまし
て。相済みませんです。

かさね　いいえ。

実は、颯介さんの荷物が、そのまま残っておりまして。実緒子さんに引き取
ってほしいとお願ひしたんですが、福岡から出てくるのは難しい、妹と相談
してみるといってお返事でした。あ、実緒子さんとは、今朝、電話で話しまし
た。そろそろ結論が出た頃かと思ひまして、お電話したというわけです。

かさね
大網
かさね
大網
かさね
大網

はい。
どうでしょう。近いうちに、一度、こちらに来てもらえませんか。
どうして私が。
はい？
いえ。すみません、あまりに急なことなので。
いや、わかります。では、手紙を読んでもらって、と言っても、書いた内容は大方話したな。とにかく、ご予定が決まりましたら、ご連絡ください。お待ちしています。
わかりました。

かさねが電話を切る。大網が去る。

理衣
かさね
理衣
かさね
理衣
かさね
理衣
かさね
理衣
かさね
理衣
かさね

誰だったの？
あんたのおじいちゃん、亡くなったんだって。一月前に。
え？ おじいちゃんって、お母さんとかさねちゃんのお父さん？
そう。
生きてたんだ。
え？ 死んだって聞いてたの？
違うけど。ずっと連絡がないって聞いてたから、もしかしたらって。
そうだよ。理衣は会ったこともないんだもんね。
誰が知らせてくれたの？
勝浦のナントカさん。
ナントカって。(封筒を見て) 大網さんって人？

かさね
理衣
かさね
理衣
かさね

そう。荷物が残ってるから取りに来いって。
（封筒を見て）この人、おじいちゃんとどうい関係？
さあ。手紙に書いてあるんじゃないの？
じゃ、早く読んでみてよ。
あんたが読んで。私は姉さんに電話する。

理衣が手紙を読む。かさねは携帯で電話をかける。

かさね

理衣

かさね

理衣

かさね

理衣

かさね

理衣

かさね

（電話に）……もしもし、姉さん？ ……かさねです。仕事が終わったら電話して。じゃ。（切る）
留守電？

うん。（携帯を操作して）あ。姉さんから、電話来てたわ。朝の八時に起きてるイラストレーターなんかいないって。

（手紙を読んで）大網さん、おじいちゃんに家を貸してたんだって。

そう。（携帯を操作して）あ。メールも来てた。

（手紙を読んで）アトリエに、かなり絵が残っておりますわ、だって。おじいちゃんも絵を描いてたの？

そう。典型的な、売れない画家。

（かさねの携帯を示して）お母さん、何だって？

「イヤなら断って」だって。わかってるなら、自分で断ればよかったのに。

かさねちゃん、断るつもり？

そういうわけにもいかないだろうけど。父親っていったって、顔もロクに覚えてないし。

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

理衣
かさね

そうなの？

最後に会ったのは、二十五年も前なんだよ。一緒に暮らした記憶だって、ほとんどのない。あの人、しょっちゅう、フラフラしてたから。

前から聞きたかったんだけど。おじいちゃんは、どうして家を出ていったの？ 要するに、私たちが邪魔だったのよ。

邪魔？

あの人にはね、好きな時に好きな場所へ行きたかったの。いろんな土地で絵を描くことが、家族より大事だったわけ。自由な生活が欲しくて、妻と子供を捨てたのよ。

本当に、一度も連絡が来たことないの？ おばあちゃんが亡くなった時も？ 知らなかったんじゃないの。こっちから連絡する気もなかったし。

どこにいるのかわからなかったから？

わかってたとしても同じだよ。

かさねちゃん、おじいちゃんのことを許せないんだね。当然でしょう。あんたはあの人のこと知らないから、ピンと来ないかもしれ

ないけど。

わかった。勝浦には、私が行くよ。

理衣が？ どうして？

知りたいたいから。おじいちゃんがどんなところに住んでたのか。どんなふうに暮らしてたのか。ちようど夏休みに入ったところだし。

ちよつと待ってよ。あんたが行ったって意味がないでしょう。

荷物の整理ぐらい、私にもできるよ。大綱さんの話も聞きたいし。

聞いてどうするの。大体、あんた、おじいちゃんに会ったこともないじゃないやな

理衣

い。
だから知りたいの。私にだって、知る権利はあるでしょう？ たった一人の

かさね

孫なんだから。

理衣

あんた、意外と頑固だったんだ。

かさね

気付いてなかったの？ 頑固なのは、うちの家系だよ。

理衣

わかった。私も行く。

かさね

ホントに？
しようがないでしょう。あんたを一人で行かせたら、姉さんに怒られるだろうし。

理衣

じゃ、決まりだね。

かさねが頷く。二人が歩き出す。

七月二日昼。千葉県勝浦市にある、芝山颯介の家。大網がやってくる。

大網 さあさあ、こちらへどうぞ。庭から直接、入れるようになってますんでね。

理衣 素敵なお家ですね。ちよっと古いけど。

かさね

理衣。

大網 ちよつとどころじゃない、相当、年季が入ってますわ。私と同一年ですから。
理衣 そうなんですか？

三人が中に入る。

大網 私のじいさんも漁師だったんですが、趣味で絵を描いてましてね。アトリエ

付きの家に住むのが夢だったらしくて、引退と同時にここを建てたんです。
亡くなる直前まで嬉しそうに、下手クソな絵を描いてましたわ。

理衣 大網さんも、漁師さんなんですね？

大網 一応、漁業組合の会長をやってます。立ち話も何ですから、座りましようか。
三人が椅子に座る。

大網 颯介さんとは、五年前、港で知り合いましたね。

大網 理衣

かさね
大網

かさね
大網 理衣

かさね
大網 理衣
かさね

港で？

あの人が、海の絵を描いてたんですわ。見かけない顔だと思って声をかけたら、同じ年だとわかった。じゃ、飲みに行こうかという話になって、結局、その日はウチに泊まったんです。

会ったその日にですか？ 凶々しいですね。

いやいや、私が無理に誘ったんです。私、日本酒に目がないんですが、颯介さんが全国の銘酒に詳しくてね。あの人、若い頃から、あちこち旅して回ってたでしょう。日本酒談義で盛り上がって、気付いたら朝になってました。おじいちゃんもお酒強かったんだ。(かさねを見て) 家系だね。

うるさいな。
次の日も、颯介さんは港で絵を描いてました。出来上がったのを見て驚きましたわ。波の音が聞こえてくるような気がしましたね。当たり前ですが、じいさんの絵とは比べ物にならない気がしました。ちょうどここが空き家で、本物の画家に住んでもらったら、じいさんが喜ぶだろうと思いましたが、まだまだ二人で酒も飲みたかったんで、ここに住めって引き留めたんですわ。それで五年も居座ったんですか。まさか、家賃も払わずに？

いやいや、ちゃんともりましたよ。

祖父は、何か仕事をしてたんでしょうか？

私の持ちビルで、清掃の仕事を。あとは、近所の子供を集めて絵を教えたり、老人ホームに行つて絵を教えたり。

へえ。(かさねに) おじいちゃん、昔から、絵の先生だったの？

一緒にいた頃は違った。大体、人にものを教えるようなタイプじゃなかったと思うけど。

大網

理衣

大網

理衣

大網

かさね

大網

かさね

大網

理衣

大網

理衣

大網

理衣

大網

かさね

かさね

確かに、先生らしくはなかったですわ。たとえば魚を描きたいと子供が言ったら、釣りに行くんです。「描く前に知ろう」というのが口癖でね。絵を描く時間より、外に出ている時間の方が長かったかもしれないわね。

ひよっとして、大網さんも習ってたんですか？

いやいや、私は絵は苦手です。私が描くと、犬がウナギに見えるんでね。それ、逆にすごいですよ。

颯介さんにも言われましたわ。おもしろいから、そのままいろいろって。

ところで、父の葬儀にかかった費用を伺いたいんですが。

いや、それは気にしないでください。町内会やら老人ホームやら、颯介さんと付き合いのあったみんなまで香典を出し合いましたから。

でも、そういうわけには――――

いや、これぐらいのことはさせてください。女房は先にあの世へ行っちゃいましたし、息子たちも独立して家を出ていった。颯介さんという話し相手が

できて、本当に嬉しかったですわ。

家族の話も聞いたんですよ、おじいちゃんから。

颯介さんはイヤがりでしたがね。私が強引に聞き出しました。

どんなことを言ってたんですか？

娘二人を置いて家を出たと。万が一のためにと、お二人の名前も聞きました。万が一がこんなに早く起きるとは、思ってたんですけどね。

名前だけで、住所を調べたんですか。

お知らせするのが当然だと思いましたが。離れて暮らしていても、親子は

親子ですからね。

大網

この家にあるもの、全部ですわ。いらぬものは処分すればいいが、どうも、私には判断がつきかねましてね。

理衣

この家って、何部屋あるんですか？

大網

ええと、あっちの奥に寝室と物置があつて、台所があつて、こっちの奥にアトリエがあつて。居間を合わせて、五部屋ですわ。

理衣

五部屋か。(かさねに)一日じゃ終わりそうにないね。

大網

よかつたら、何日でも泊まつていってください。足りないものがあつたら、電話をくれれば、すぐに用意しますんで。

理衣

ありがとうございます。

大網

それじゃ、私はこれで。

大網が去る。

理衣

いい人だね、大網さんって。

かさね

ホント。なんでお父さんなんかと気が合つたんだろう。

理衣

おじいちゃん、まあまあ幸せに暮らしてたんだね。ちよつと安心した。

かさね

あんた、あっちの部屋を見てきてよ。私はアトリエを見るから。

理衣

わかつた。

理衣が去る。かさねがアトリエに向かう。と、奥から一宮優太がやってくる。

かさね

どちらさまですか。

優太

あんた、颯介の娘？

かさね　　そうですけど、あなたは。ここで何をしてるんですか。
優太　　あんたと話してるけど。
かさね　　そうじゃなくて、どうしてここにいますか。
優太　　住んでるからだよ。
かさね　　ここに？　いつから？　父のお知り合いですか？
優太　　友達だよ。
かさね　　友達？

理衣が戻ってくる。絵を一枚持っている。その絵を裏向きにして椅子に置く。

理衣　　かさねちゃん、その人、誰？
かさね　　よくわからない。お父さんの友達だって言ってるけど。
優太　　（理衣に）あんたも颯介の娘？
理衣　　違います。私は、娘の娘、つまり孫です。
優太　　へえ。じゃ、あんたたち、親子なんだ。
かさね　　違う。この子は、私の姉の娘。それより、私の質問に答えて。ここで何をしていたのか。

大網が戻ってくる。

大網　　どうもすみません、かさねさん。大事なことを言い忘れてました。
優太　　こんにちは。
大網　　はい、こんにちは。あんたのこと、かさねさんたちに話したかね。

かさね
大網
理衣
大網
優太
理衣
優太
かさね
かさね
大網
優太
優太
かさね
優太
かさね
大網
かさね
優太

いいえ、まだ。全然、会話が成立しないんですけど。
相すみません。この子は一宮優太。颯介さんの同居人なんですわ。
同居人？

一年ぐらい前でしたかね。いきなり颯介さんに紹介されたんです。今日から
友達と一緒に住むって。

友達って、こんな若い人と？

なんで驚くんじゃ？ 友達になるのに、歳が関係あるのか？

そういうわけじゃないけど。

（大網に）それで、彼は今もここに住んでるんですね？

行くところがなくて言うんでね。無下に追い出すわけにもいなくて。

（かさねに）待ってたんだよ、あんたを。

え？

大網さんが、颯介の娘が来るって言ったから。

そうか。荷物の整理を手伝うつもりだったのか？

手伝っていうなら手伝うよ。

優太君、だよ。あなた、歳は幾つ？

もうすぐ十九だけ。

じゃ、大学に行ってるの？

いや、優太君は働いてますわ。颯介さんと同じで、私のビルで清掃の仕事を。
（優太に）行くところがなくていうのは、どういう意味？

そのままの意味だよ。

ご両親は？ ご健在なの？

なんでそんなこと聞くんだよ。

かさね
優太
理衣
優太
かさね
優太
理衣
優太
かさね
優太
かさね
大綱

だつて、あなた、未成年でしょう。ご両親が健在なら、実家に帰るって選択肢もあると思つて。

親はいない。兄弟も親戚もない。

天涯孤独つてこと？ 身内つて呼べる人はいないの？

身内？

家族とか、親類とか、あと、すごく親しい仲間とか。

だつたら颯介。俺の身内は颯介だけだ。

そう。あの人、他人の面倒はよく見てたつてことか。

かさねちゃん。

大綱さん。荷物の整理は、優太君の方が適任じゃないでしょうか。

どういう意味だ？

そのままの意味よ。私は、あなたが生まれる前から、父と会つてなかった。ほとんど他人みたいなものなの。そんな私よりも、身近にいたあなたに任せた方がいいんじゃないかって提案してるのよ。

他人つて何だよ。あなた、颯介の家族じゃないのか。

聞いてなかったの？ あの人とは、血が繋がつてるつてだけなの。

じゃ、なんでここまで来たんだ？

大綱さんに頼まれたからよ。

来たつてことは引き受けたつてことだろう？ ちゃんと責任を果たせよ。

あなただつて、大綱さんのお世話になつてるんでしよう？ だつたら役に立ちなさいよ。

まあまあ、かさねさん。優太君も、もう少し口のきき方に気をつけて。冷静に話し合つてくれると嬉しいんですがね。

かさね

すみません。

優太

押しつけようとしたあんたが悪いんだ。

かさね

何ですって？

大網

まあまあ。私としては、どっちにやっても構いません。ただし、なるべく早めにお願いたいです。実は、この土地を買いたって人がいますね。この家は、今月いっぱい取り壊すことになったんですわ。

優太

そんなこと、初めて聞いた。

大網

すまんな。つい昨日、決まったんだ。住むところは、私が責任を持って探すから。(かさねに) ゆっくり話し合ってください。くれぐれも冷静に。

理衣

大丈夫です。私が見張ってますから。

大網が去る。

理衣

どうする？ お茶でも淹れてこようか？

優太

俺はいい。(とアトリエに向かう)

かさね

ちよつと、どこ行くのよ。

優太

アトリエ。すぐ戻る。

優太が去る。

かさね

何、あいつ。なんであんなに偉そうなわけ？

理衣

かさねちゃん、大人気ない。年下相手にムキになってどうするの。

かさね

悪かったわよ。

理衣
かさね

それより、おじいちゃんの荷物。物置に、すごい絵がぎつしり詰まっていたよ。すごいって？
大網さんが言っていたじゃない。海の絵から、波の音が聞こえてきたって。本当にそうなの。絵が生きてるって感じなの。（椅子から絵を取り上げて）これ、見てよ。女の人の声が、聞こえてきそうな気がしない？

かさねが理衣から絵を受け取る。絵を見たかさね、息を飲んで固まる。

理衣

かさねちゃん？

（絵を見つめている）

理衣

どうしたの、固まっちゃって。まだ腰が痛いのか？

かさね

（絵を見つめている）

理衣

とにかく座って。お水でも飲む？

理衣がかさねを座らせて、去る。

かさね

信じられない。どうしてこんな絵が描けるのか？ どうして……どうして誰も認めなかったのか？

かさねが携帯を取り出して、かける。

かさね

もしもし、美浜さん。お久しぶりです、かさねです。……すみません、何度も誘ってもらってるのに参加できなくて。……いえ、仕事です。彼氏ができたとかじゃなくて。できたら真っ先に報告しますって。……はい、頑張りましょう。そんなことより、見てほしい絵があるんです。美浜さんの意見が聞きたくて。……いえ、今、勝浦にいました。……ええ、ちよつと。……いいえ、彼氏じゃないです。……わかりました。写真を送ります。

かさねが携帯のカメラで、絵を撮影。理衣が水の入ったコップを持ってくる。

理衣

何してるの、かさねちゃん。

かさね

（携帯をしまつて）うん、ちよつとね。

理衣

（コップを渡して）優太君は？

かさね

まだ戻ってこない。

理衣

（絵を見て）これ、おじいちゃんの絵だよ。モデルはもしかして、若い頃

かさね

のおばあちゃん？
違うよ。お母さんはこんな顔じゃなかった。

理衣
かさね

じゃ、誰？
私に聞かないで。

優太がやってくる。日記帳を持っている。

優太

（かさねに日記帳を差し出して）これ、持っていけよ。

かさね

何？

優太

颯介の日記。あんたに渡そうと思って持ってた。後は俺がやるから、これ持って帰れよ。

理衣

出ていけってこと？

優太

（かさねに）荷物整理、やりたくないんだろう？ だったら。

かさね

誰がやりたくないって言った？ イヤなら、こんなところまで来るわけないでしょう。

優太

でも、さっきは。

かさね

さっきのことは謝る。いきなり同居人がいるって聞いて、ちよつとショック

理衣

だったのよ。もう一回、ちゃんと自己紹介させてくれない？

かさね

どうしたの、かさねちゃん。急に態度変えちゃって。

優太

（優太に）芝山かさねです。職業はフリーのイラストレーター。

かさね

フリーって？

理衣

会社に入らないで、一人でやってるってこと。

かさね

前はデザイン事務所で働いてたんだよね。でも六年前、ちょうど三十歳の時に独立したの。同時に結婚もしたんだけど、二年前に別れちゃったんだ。

かさね

理衣。余計なこと言わないで。

理衣 優太

優太

かさね

優太

かさね

優太

かさね

理衣

かさね

理衣

優太

理衣

優太

理衣

優太

かさね

優太
かさね

優太君、作家の花見川海人って知ってる？

いや。

ホントに？ 大人向けのファンタジーを書いて、結構、有名なんだよ。かさねちゃんはずっと、その人の本の表紙を任されてるんだ。あと、デパートのポスターとか、企業のカレンダーとか。

（かさねに）なんで離婚したんだ？

そういうこと、蒸し返さないでくれる？

あんたが浮気したのか？

全然違う。どこからそんな発想が出てくるわけ？

じゃ、なんでだよ。

あなたには関係ないでしょう？

忙し過ぎたんだよね、お互い。それで、すれ違いが多くなって。

それ以上言ったら、海に突き落とすよ。

（優太に）私は我孫子理衣。かさねちゃんの姪。大学三年生。大学では日本文学を専攻してる。

……

優太君の番だよ。

一宮優太。十八。大網さんのビルで掃除をしてる。

よろしくね、優太君。

それで、どこから手をつけるかだけど。最初に、優太君とあの人の荷物を分けなくちゃいけないと思うんだよね。

俺の荷物は着替えだけだ。全部、アトリエにある。

そうなんだ。じゃ、優太君が欲しいと思うものを選んでくれる？

優太 俺は後でいい。それより、これ。(日記帳を差し出す)

かさね どうして私に？ あの人が渡せて言ったの？

優太 颯介は何も言っていない。でも、娘が持ってた方がいいだろ。

かさね 今さら、そんなものもらっても。優太君がいらぬなら捨てて。

優太 俺はあんたに持っていけって言ってるんだ。

かさね あのね、優太君。あの人は、私が十一歳の時に家を出ていったの。思い出っ

て呼べるものがほとんどないのよ。だから、日記なんか渡されても困る。あ

の人がどんな生活を送っているかが、まったく興味ないもの。

優太 読みもしないで捨てるっていうのか？ 颯介に失礼じゃないか。

かさね 失礼なのはどっちよ。捨てるのがイヤなら、あんたが引き取ればいいでしょ？

理衣 やめなよ、かさねちゃん。せっかく優太君が持ってくれたんだから、読む

だけ読んであげれば？ 日記ぐらいで、意地を張ることないじゃない。

かさね 別に意地なんか。

理衣 (優太に) 読んだ後で捨てるって決めるなら、構わないでしょう？

優太 (かさねに) あんたがそうしたいなら。

理衣 ほら、かさねちゃん。

かさねが優太から日記帳を受け取る。鞆に入れる。

理衣 読まないの？

かさね 後で読む。一人になってから。(優太に) 捨てたりしないから安心して。

優太 君は読んだの？ おじいちゃんの記事。

優太 一日分だけ。俺がここに来た日。何て書いてあるか気になって。
理衣 それ、聞きたい。教えて。
優太 (目を閉じて)「七月一日。晴れ。我が家に一人、住人が増えた」。

颯介がやってくる。食料品の入った紙袋を持っている。

優太 (優太に)ここで何をしてるんだ？

颯介 あんた、この家の人？

優太 ああ、そうだ。どこから入ってきた？ 玄関の鍵はかかってたが。

かさね (アトリエの方向を示して)あっちの窓は開いてた。

理衣 何？ 勝手に入ったってこと？ あんた、泥棒だったの？

かさね かさねちゃん、うるさい。

颯介 だって。

優太 (優太に)大網さんの知り合いか？ 大網さんにはいないぞ。

颯介 大網？

優太 違うのか。じゃ、なぜここに来たんだ？

優太 : : 親戚が住んでるって聞いたから。

颯介 俺は五年前からここに住んでる。その前にいた人のことが知りたかったら、

優太 持ち主の大網さんに会いに行けばいい。

颯介 この家じゃないのかもしれない。住所が間違ってたのかも。

優太 君の名前は。

颯介 え？

優太 名前だよ、名前。近所に同じ名字の人がいるかもしれないだろう。

優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介

親戚とは名字が違うんだ。
そうか。じゃ、その親戚の名字を教えてください。

人に聞く前に、自分から名乗るべきだな。俺は芝山颯介。君は警察に突き出すのか？

警察？

俺は空き巣に入ったわけじゃない。本当に親戚がいると思って。

それはもう聞いた。でも、いなかったんだろう。

引越したんだ、きっと。

残念だったな。

俺、他に行く所がなくて、どうしたらいいかわからなくて。そしたら、この家の窓が開いてるのが目に入って。

一休みしようと思ったのか？ それとも、金目のものがあつたら盗む気だったのか？

空き巣じゃないって言うてるだろう！

悪かった。一応、確認しただけだ。頭のいい空き巣なら、この家は選ばない。構えは立派だが、住んでるのはその日暮らしの男だからな。

その日暮らしって？

見ての通り。余分な金がないってことさ。

疲れてたんだ、俺。あちこち歩き回って。

ご苦労だったな。腹は減ってないか？ 減ってるなら、何か作ってやるぞ。

腹は減ってる。好き嫌いはあるか？ アレルギーは？

優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介

別に。
うん。チャーハンとオムライス、どっちがいい。
一宮優太。
何だって？
俺の名前。一宮優太。
優太か。いい名前だ。ちよっと待ってる。

颯介が去る。

理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太

待って。チャーハンとオムライス、どっちにしたの？
どっちも。颯介が両方作ってくれた。
両方か。いいなあ。
あんた、なんで呑気にしてられるわけ？ この子、空き巣に入ろうとしたんだよ？
やっぱりそう思うのか。
だって変じゃない。いくら窓が開いてたからって、知らない人の家に入る？
疲れてたんでしよう？ 親戚の家を探して歩き回ったから。
本気で言ってるの？
だって。本当に空き巣だったんなら、のんびりオムライスなんか食べると思う？
そんなの、わからないじゃない。死ぬほどお腹が空いてたら。
どうして疑うの？
いいよ、別に。その人が疑うのは当然だ。

理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね

よくないよ。かさねちゃん、優太君は、おじいちゃんが一年も一緒に暮らし
た人なんだよ。

わかった、もう疑わない。でも、どうして一緒に暮らすことになったわけ？
颯介が言ったんだ。行くところがないなら、ここにいればいいって。

で？ 親戚は見つかったの？

（首を横に振る）大網さんに聞いても、わからなかった。多分、俺が住所を
聞き間違えたんだ。

そう。

かさねちゃん、どうする？

どうするって？

荷物の整理。さっき、寝室も見たんだけど、壁一面が本棚だった。絵もいっ
ぱいあるし、どこから手をつければいいのかわかんないんだけど。

三人で手分けして、順番にやっついていくしかないよ。

そうだよ。今日中に終わらなかつたら、また出直せばいいか。

私、今日はここに泊まる。理衣は帰っていいよ。

どうして？

腰が痛いものすごく。荻窪からここまで、三時間も電車に乗ったでしょ
う？ またあれを繰り返したら、二度と立ち上がれない気がする。

そんなに？ だったら、病院に行けば。

ギックリ腰で病院に行っても、湿布しか出してくれないよ。

ギックリ腰って？

腰が痛いってことよ。ものすごく。

わかった。じゃ、私も泊めてもらう。優太君、いいかな。

優太 理衣
優太 理衣

好きにすればいい。
お腹が空いたな。何か食べるものある？
冷蔵庫の中に牛乳がある。
じゃ、買い出しに行こう。お店に連れていってくれる？

理衣と優太が去る。

七月三日朝。かさねが携帯を取り出して、かける。

かさね

もしもし、美浜さん。おはようございます、かさねです。……どうでした？
写真、ちゃんと見られましたか？ ……そうですね、写真じゃちよつと。
……見合い写真ですか？ いえ、撮ったことないですけど。……八割増しの
美人に？ その広告、おかしいですよ。やめた方がいいです。それより、私
が送った写真は……はい。……え？ ……それはどういう………わかりました。
ありがとうございます。……大丈夫です。美浜さんはそのまま十分、魅力
的です。それじゃ。(切る)

かさねが椅子に置いてあった肖像画を見つめる。理衣がやってくる。風景画を一枚持つている。

理衣
かさね
理衣
かさね
かさね

信じられない。かさねちゃんがこんなに早く起きてるなんて。
早いつて言っても、もう十時でしょう。あんたが寝過ぎなのよ。
波の音つて、よく眠れるんだね。久々にぐっすり寝た気がする。
よかったじゃない。
何、怖い顔して。もしかして寝てないの？

かさね 理衣 かさね 理衣 かさね 理衣 かさね 理衣 かさね 理衣 かさね 理衣 かさね 理衣 かさね

寝たよ、少しは。
でも、遅くまで物置でゴソゴソしてたよね。何やってたの？
その絵は？
私が一番気に入った絵。海の色がキレイだと思わない？
そうだよ？ いい絵だよ？
何？ いい絵じゃないの？
あのね。大学時代の先輩に、美術雑誌の編集部で働いてる人がいてね。美浜さんっていう女性なんだけど。
うん。
その人、今まで何人も、才能のある新人を見つけてきたわけ。もともとキュレーター勉強してたんだけど、就職先が見つからなくて。
待って。キュレーターって何だっけ？
日本語で言えば学芸員。美術館で、展示する作品を選んだり、企画を立てたり。海外には、フリーで活躍してる人もいる。
思い出した。キュレーターの評価によって、絵の値段が変わったりするんだよね？
そう、それよ。で、美浜さんに、物置にある絵を見もらったの。何枚か私を選んで、写真を送って。
つまり、おじいちゃんの絵を鑑定してもらったってこと？
本当は、写真でちゃんとした鑑定なんかできないよ。でも、どうしても美浜さんの意見が聞きたくて。
それって、かさねちゃんが、おじいちゃんの絵をいいと思ったから？
そういうこと。

理衣　で、美浜さんは？　何て言ったの？

かさね　「まあまあ」だって。

理衣　「まあまあ」？　わかんない。褒めてるの？　貶してるの？

かさね　褒めてる方じゃないかな。美浜さんは厳しい人だから。どんなに売れてる画家でも、伝わってくるものがないと、無言になっちゃうの。評価ゼロ。

理衣　かさねちゃんの絵は？

かさね　そんなの、怖くて聞けないよ。でもね、送った中で、一枚だけ、美浜さんが

「見る価値あり」って言った絵があったんだ。相当、褒めてるってことね。

理衣　それがこれ。（と肖像画を示す）

かさね　そうなんだ。（風景画と比べて）　私は、どっちも好きだけど。

理衣　美浜さんは、九十九パーセントの確率で、違う画家が描いてるって。

かさね　え？　おじいちゃんじゃないってこと？

理衣　よく見て。（肖像画を示して）　こっちはサインがないでしょう。

理衣　（見て）本当だ。

かさね　なんで最初に気がつかなかったのか、自分でもわからない。タッチは似てる

理衣　けど、色使いが全然違うもの。

かさね　待って。おじいちゃんじゃないとしたら、誰が描いたの？

理衣　誰だと思う？

かさね　まさか。

優太がやってくる。

かさね　（肖像画を示して）　この絵、あなたが描いたの？

優太 かさね 理衣 優太 理衣 優太 かさね 優太 かさね 優太 かさね 理衣 優太 かさね 優太 かさね 優太 かさね 優太 かさね

優太 そうだけど。
かさね どうして昨日、言ってくれなかったのよ。
優太 聞かれなかったから。
かさね 他にもあるの？ あなたの作品。あるなら今すぐ見せて。
優太 なんでだよ。
かさね いいから、ここに持ってきて。
優太 それが人にものを頼む態度か？
かさね お願いですから、見せてください。
優太 イヤだ。
かさね あなたね、いい加減にしなさいよ。
理衣 かさねちゃん、落ち着いて。優太君、どうしてイヤなの？
優太 最後まで仕上げたのは、それだけだ。後はまだ完成してない。
かさね 完成してない絵が何枚あるの？
優太 三十枚ぐらいかな。
かさね どうして仕上げないのよ。
優太 焦るなって言われたから。
誰に。
優太 颯介だよ。納得が行くまで、色を選べって。
理衣 優太君、おじいちゃんに教わってたんだ。
優太 悪いか？
理衣 悪いなんて言っていないでしょう？
かさね ねえ、優太君。ここに来る前、誰かに絵を習ってた？
（首を横に振る）

かさね

優太

かさね

優太

かさね

優太

じゃ、あの人だけ？ いつから？

去年の九月。

てことは十カ月？ たったの？ でも、その前から、油絵は描いてたのよね？

（首を横に振って）一度も。どうやって描くのか知らなかった。

嘘でしょう？

嘘なんかついてない。全部、颯介が教えてくれたんだ。

颯介がやってくる。スケッチブックを持っている。

颯介

優太

颯介

優太

颯介

ただいま。

また港に行ってたの。

ああ。今日は尾流雲が見事だったぞ。

びりゆううん？

ああ。（スケッチブックを開いて）ほら、こういう雲だ。雲の下から、尻尾

みたいに筋が伸びてるだろう。だから、尾が流れると書いて、尾流雲だ。美

しい名前だと思わないか。

雲の名前なんか覚えて楽しいのか。

楽しいね。雲だけじゃない、鳥や花の名前を覚えるのも楽しい。描く前に知

ろう、だ。何かを描く時は、名前を知っている方が、より近い気持ちで描け

る。ような気がする。

名前がわからない時は。

好きな名前を付ければいい。自分の直感に従って。

たとえば。

優太

颯介

優太

颯介 そうだな。二軒隣に、真っ黒い猫がいるだろう。俺はあいつを、おはぎちゃ

んと呼んでいる。

おじいちゃん、センスない。

同感。

颯介 まあ、気分の問題だ。本当は名前など知らなくても絵は描ける。そもそも、

絵に言葉は必要ないからな。喋りたいヤツは喋ればいい。俺は代わりに絵を

描く。

結構、喋ってると思うけど。

だから売れないのかもしれないな。

それでいいのかよ。

売れる売れないは関係ない。描きたいから描いてるんだ。

へえ。

君はどうだ。絵は好きか？

別に。

一度ぐらいは描いたことがあるだろう。

たまに。子供の頃。

晩飯までの暇潰しに、描いてみないか。

颯介が優太にスケッチブックと鉛筆を差し出す。

優太
颯介

何を描けばいいんだ？

何でも。好きなように描いてみる。

優太がスケッチブックと鉛筆を受け取る。優太がスケッチブックを見つめる。描き始める。最初はゆっくり、次第に速度を上げる。颯介が戻ってくる。

颯介 (見て) ずいぶん速いな。

優太 (描いている)

颯介 山か? ……こっちは川か。……桜並木か。満開の。……もうすぐ秋だぞ。

優太 (描いている)

颯介 ……どこの景色を描いてるんだ?

優太 (描きながら) どこだか忘れた。子供の頃に見た場所。

颯介 君……記憶だけで描いてるのか? こんなに細かく?

優太 (手を止める)

颯介 どうした? まだ途中だろう。

優太 こんなことしても、金にならないから。俺、そろそろ行くよ。

颯介 行くって、どこへ。

優太 わからないけど。もともと、二カ月もいるつもりじゃなかったんだ。

颯介 ここでよければ、いくらでもいていいんだぞ。

優太 でも、家賃が払えない。

颯介 もちろんタダでは言わない。ここに住む代わりに、絵を描いてくれ。

優太 おかしなこと言うなよ。

颯介 優太。君は絵を描いた方がいい。いや、描くべきだ。

優太 なんでだよ。今まで一度だって、思い通りに描けたことがないのに。

颯介 でも、描きたいんだろう? 君の中には、描きたいという思いが溢れている。

優太 それは、この絵を見ればわかる。思いを表現するためには、学ぶことが必要

優太
颯介
優太
颯介
優太
颯介

だが。
油絵も描けるようになるのか？ 颯介みたいに。
ああ。わからないことは俺が教える。俺の授業を受けてくれ。
でも。
今日の晩飯は、ハンバーグにしようと思ってたんだがな。目玉焼きも付けて。
俺も手伝う。
よし。

颯介が去る。

理衣
かさね
理衣
優太
かさね
理衣
優太
かさね
理衣
優太
かさね

つまり、優太君には絵の才能があるってこと？
かなりね。あの人が、それを見抜いたの。
すごい。本職の画家と、イラストレーターに認められるなんて。
好きで描いたわけじゃない。颯介が描けって言うから。
（肖像画を示して）それでこれだけ描ければ、大したものよ。
仕事に行ってくる。夕方までに、寝室と物置を片付ける。
駄目だよ、命令口調は。
（優太に）寝室と物置ね。任せといて。行ってらっしゃい。

優太が去る。

理衣
かさね

かさねちゃん、コロコロ態度変え過ぎ。
変えたくもなるよ。この絵を見たら。（一枚の絵を取り上げて）私は物置か

ら始める。寢室の整理をお願い。

かさねが去る。

理衣

その時、かさねちゃんが何を考えているのか、私にはわからなかった。ただ、おじいちゃんの絵を見られたことが嬉しかった。どの絵も、見ているだけで、胸の奥が温かくなった。優太君が描いた絵は、見るたびに印象が変わった。モデルは、微笑んでいる若い女性。その微笑みがある時は楽しそうに、ある時は淋しそうに感じられるのだ。見ている私のせいなのか、優太君がそういうふう描いたのか。それも私にはわからない。でも、何度でも見たくなる、不思議な絵だった。

七月三日夜。颯介宅。優太がやってくる。

理衣

お帰りなさい。

優太

終わったのか、荷物整理。

理衣

寝室は大体片付けた。台所は、手をつけてない。優太君がまだ使うと思って。俺のことは気にしなくていい。飯は外で食べればいいし。

優太

おじいちゃんに習わなかったの、料理。

理衣

習ったけど、俺一人じゃ、うまくできない。目玉焼きぐらいしか。

優太

私も似たようなもんだよ。ねえ。おじいちゃんて、家族のこと何か言ってた？
家族？

理衣 優太 理衣

どうして家を出たのかとか。
奥さんと娘がいることは聞いてた。それ以上は別に。
奥さんが亡くなったこと、知ってたかな？ 私のおばあちゃんってことだけ
ど。

優太 理衣

いや。いつだ。

十年前。私が十歳の時。私、もしかしたら、おじいちゃんがお葬式に来るんじゃないかと思ってたんだよね。でも、とうとう来なかった。だから、おじいちゃんも、もう亡くなってるんだろうなと思ったの。

優太

来てほしかったのか？

理衣

一度、会ってみたかったんだ。どんな人なのか知らなかったから。

優太

颯介は、油絵の具の匂いがした。

理衣

それだけ？
釣りに連れていってくれた。朝の市場にも一緒に行った。泳ぎも教えてくれ

優太

た。俺、海で泳いだことなかったから。

理衣

優太君の方が、よっぽど家族みたいだね。

優太

家族と友達は違う。颯介の家族は、あんたたちだけだ。

理衣

優太君のご両親は？ どんな人たちだったの？

アトリエから、かさねがやってくる。

かさね

優太君、帰ってたんだ。

理衣

あれ？ かさねちゃん、アトリエにいたの？

かさね

優太君の絵を見せてもらってた。勝手にごめんなさい。

優太 かさね
優太 かさね
理衣 かさね
理衣 かさね
理衣 かさね
理衣 かさね
理衣 かさね
理衣 かさね
優太 かさね
優太 かさね
理衣 かさね
理衣 かさね
かさね

何のために。

あなたの才能を確かめるためよ。他の絵も全部、写真に撮って、信頼できる人に見てもらった。美浜さんっていう人なんだけど。

俺の絵を、勝手に他人に見せたのか。

ごめんなさい。でも、このままじゃもつたいないと思って。

もつたいないって？

優太君。あなた、コンクールに応募してみる気はない？ もうすぐ、大浪秀平展っていう、公募展の募集が始まるの。日本で一番大きなコンクールで、

大賞の賞金は一千万。

一千万？

最終締め切りは半年後。応募点数は二点まで。今から描き始めれば、絶対に間に合う。必要なら、ちゃんと指導してくれる人を探すって、美浜さんが。

優太君の絵が、大賞を取れそうってこと？

大賞は無理でも、新人賞は確実に狙えるレベルだと思う。

ちなみに、新人賞の賞金は？

三百万。

うわ。十分すごい。

どう、優太君。挑戦してみない？

何のために？

決まってるじゃない。あなたの絵を、大勢の人に認めてもらうためよ。

俺は別に、認めてほしいなんて思わない。颯介が描けっていうから描いただけだ。

イヤイヤ描いたってこと？

じゃ、断ればよかったじゃない。

優太
理衣

優太

かさね

優太
かさね

優太

かさね

かさね

優太

かさね

優太
理衣

断ったら、ここに住めないだろ。
でも、おじいちゃんと言ってたんでしよう？ 優太君の中には、描きたい気
持ちが溢れてるって。
颯介が決めただけだ。俺はただ、よそへ行くのが面倒だっただけで。
嘘つかないで。
嘘？
私はね、美大に入ってから、二十年近く絵を描いてきたの。大学でも、会社
でも、いろんな人の絵を見てきた。イヤイヤ描いてるかどうかぐらい、私に
だってわかる。あなたの絵は、描きたくてしようがない人の絵よ。
あんた、自分の意見は全部正しいと思ってるのか。
全部なんて思うわけじゃないでしょう。でも、絵に関しては自信がある。
残念だけど外れだよ。颯介に言われなかったら、俺は絵なんか描かなかった。
颯介はもういない。だから、俺が絵を描く理由もない。
何、贅沢なこと言ってるのよ。みんながみんな、あなたみたいな才能を持つ
てるわけじゃない。あなたのセンスは飛び抜けてる。私が二十年かけても追
いつけないものを、最初から持つてるの。せっかく持つてるんだから、ちゃ
んと使ったらどうなのよ。出し惜しみなんかしないで。
わからないな。なんでそんなにムキになるんだ？
あなたが、描きたくないなんて嘘をつくからよ。
どうなの、優太君。本当は描きたかったんじゃないの？
何なんだよ、二人して。
私は、絵のことはよくわからないけど。音楽の才能を持つてる人が、音楽が
大嫌いななんて有り得ないと思ってる。絵も同じじゃないの？

かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね
理衣　　理衣　　理衣　　理衣　　理衣　　理衣　　理衣　　理衣
優太　　優太　　優太　　優太　　優太　　優太　　優太　　優太
かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね　　かさね

かさね　　そうよ。才能がなくても、描きたくてしょうがないって人もいるけどね。私
理衣　　がいい例よ。
かさね　　かさねちゃんか？　それはないでしょう。
理衣　　自分のことは、自分が一番よくわかってる。私にあるのは、続ける力だけ。
かさね　　どうしてそんなこと言うの？
理衣　　私、花見川先生の仕事を切られたの。次に出る新刊から、違う人が表紙を描
かさね　　くことになった。
理衣　　本当？
かさね　　出版社の担当からは、もっと若い人にチャンスをあげたいからって説明され
理衣　　た。問題なのは、若さじゃなくて才能なのに。
かさね　　かさねちゃん。
理衣　　それだけじゃない。五年も続いた、カレンダーの仕事もクビになった。何回
かさね　　も描き直しをさせられた挙げ句、イメージと違うって言われて。笑えるでし
理衣　　よう。
かさね　　そんなこと。
理衣　　（優太に）だからね。あなたみたいに、才能があるのに逃げてる人を見ると、
かさね　　許せないの。
優太　　逃げてる？
かさね　　絵を仕上げないのはどうして？　あなたが描きたい絵に、あなたの実力がつ
理衣　　いていかないからじゃないの？　理想が高過ぎて、失敗が怖いのよね？
優太　　そうじゃない。颯介が焦るなって言ったから。
かさね　　あなた、あの人のことを何だと思ってるの？　理想の教師？　だとしたら大
理衣　　間違いよ。だって、あなたの半分も才能がないんだから。

優太
かさね

やめろ。颯介をバカにするな。
私は事実を言ってるの。あなたの才能に気付いたことは、褒めてあげてもいい。でも、自分で教えようとしたのは間違ってる。本当にあなたのためを思うなら、大学に行かせるなり、留学させるなり、もっといい方法があったはずよ。

優太
かさね

あんた、それでも娘か？
まだわからない？ あんな人、父親だなんて思っていないの。家族を捨てて絵を選んだくせに、死ぬまで芽が出ないなんて、怠けてただけじゃない。売れなくても描きたいから描くなんて、ただの言い訳。そんな人があなたを教えたなんて、考えただけで寒気がする。
やめろって言うてるだろう！ あんたに颯介の何がわかるんだ！
よくわかってるよ。どうしようもない人だったってことは。
もういい。あんたの話は聞きたくない。

優太
優太が走り去る。

理衣
優太君！
かさねちゃん、いくらなんでも、言い過ぎだよ。

理衣が優太の後を追って、走り去る。

かさね
八つ当たりだよ、完全に。

かさねが去る。

七月三日夕、港に近い路上。優太がやってくる。後を追って、理衣がやってくる。

理衣 待ってよ、優太君。ねえってば。
優太 ついてくるな。
理衣 そういうわけにはいかない。叔母のフォローをするのは姪の役目だもの。
優太 普通は逆だろう。
理衣 かさねちゃん、いつもはもっと冷静な人なの。いろんなことがいっぺんに起きて、混乱してるんだと思う。今頃、言い過ぎたって反省してるはずだよ。
優太 だから何だ。
理衣 だから、できれば大きめの心で、話を聞いてあげてほしいんだけど。
優太 聞きたくない。結局、最後は颯介の悪口じゃないか。
理衣 たぶん、悔しいんだよ。かさねちゃんの知らないおじいちゃんを、優太君が知ってるから。私だって、ずるいって思ったし。
優太 ずるい？
理衣 おじいちゃんの料理、私も食べてみたかったなあって。
優太 だったら、探せばよかっただろう。会いに来ればよかっただろう。
理衣 そうだよ。今さら言うなって感じだよ。
優太 あんた、変わってるな。

理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太 理衣 優太
え、何が？
俺の言うことなんか、真面目に聞くことないんだ。
どうして？
どうしてもだよ。
（遠くを見て）ねえ。あれって、大網さんがおじいちゃんとか会った港かな。
ああ。
私、行きたい。一緒に行ってくれる？
なんで俺が。
帰り道がわかりません。

そこへ、一宮拓己がやってくる。ポストンバッグを持っている。優太と目が合う。優太が固まる。

拓己 理衣 優太 拓己 優太
（優太に歩み寄って）やっと会えたな。元気そうじゃないか。
（優太に）お知り合い？
違うよ。
冷たいこと言うなよ。どれだけ探したと思ってるんだ。
（理衣に）行こう。

優太が拓己をかわして歩き出す。拓己が優太の腕を掴む。

拓己 優太
おい、逃げるなよ。
（振り払って）放せ！

拓己 優太 拓己 優太 理衣 拓己 優太 拓己 優太 理衣 優太 拓己 優太 拓己 理衣 拓己 理衣 優太 拓己 理衣 拓己

(また腕を掴み) 待って。ちよっと、乱暴はやめてください！ あんた、優太の彼女か？ 違う。

(拓己に) 警察呼びますよ。

勘違いしないでくれ。俺はこいつと話がしたいだけだ。

誰なんですか、あなた。優太君と、どういう関係なんです。

(優太に) おまえが説明しろよ。

::::

どうしたんだよ。知られてまじいことなんかないだろう。

(理衣に) 兄さんだよ。俺の。

お兄さん？

そんなに驚くことか？

俺が、家族はいないって言ったんだ。とっくに縁が切れたと思ったから。

ひどいな。俺にはそんな覚えはないぞ。

俺はそう思ってたんだ。(掴まれている腕を上げて) 放してくれよ。

(手を放して) 今、どこにいるんだ？ (遠くを見て) あの食堂か？

食堂？

(拓己に) 違う。あそこには誰もいない。

じゃ、どこだ？

::::

頼むよ、優太。俺はおまえのことが心配なんだ。おまえが言わないなら、彼女に聞いたっていいんだぞ。

優太 勝浦一丁目に、遠見岬神社がある。そこの裏のアパートだ。
理衣 え？

拓己 じゃ、そこへ行こう。二人だけで、ゆっくり話がしたい。
優太 無理だ。仕事があるから。ビルの清掃。今日は夜勤なんだ。

拓己 そうか。ちゃんと働いてるのか。よかった。安心したよ。

優太 兄さんは。今、何をやってるんだ。

拓己 それは明日話そう。おまえ、携帯は。前に俺が買ってやったよな。

優太 もう持っていない。料金が払えなくなつたから。

拓己 しょうがないヤツだな。(メモとペンを取り出し、走り書きして) 俺の番号

拓己 だ。明日の朝、必ず電話してくれ。(メモを優太に差し出す)

優太 (受け取って) わかった。

拓己 (理衣に) あんた、名前は。

理衣 我孫子理衣です。

拓己 一宮拓己です。優太をよろしく。(優太に) よかったな、かわいい彼女がで

きて。

理衣 彼女じゃありません！

拓己が去る。

理衣 (優太を見て) 駄目だ。疑問が多過ぎて、何から聞いていいのかわからない。
拓己 帰ってから話す。それまで黙っててくれ。

七月三日夜、颯介宅。かさねがやってくる。コーヒーカップを載せたトレイを持ってい

る。カップをテーブルに置く。理衣と優太が中に入る。

かさね

優太

理衣

優太

かさね

優太

かさね

優太

かさね

優太

かさね

理衣

優太

かさね

優太

かさね

優太

かさね

それで？ どうして天涯孤独なんて嘘をついたの？
面倒だったんだ。説明するのが。いろいろあったから。

いろいろって？

いいだろう、別に。俺のことなんか聞いてどうするんだよ。

あなただって聞いたじゃない。どうして離婚したんだって。

でも、あんたは答えなかった。

理衣が言った通りよ。お互いに忙しくて、気持ち離れたの。起きる時間も、

食事バラバラ。会話が減って、家には寝に帰るだけになって。向こうが一

週間、出張してたのに、私は気付きもしなかった。こんなの夫婦じゃないっ

て思った。それで終わり。はい、あなたの番。

バカバカしい。あんたが勝手に話しただけじゃないか。

私は一番言いたくないことを言ったのよ。あなたも覚悟を決めて。

なんでだよ。

放っておけないからよ。身寄りがいるのに、一年も他人と暮らしてたなんて、

おかしいじゃない。どんな事情があったのか、ちゃんと知りたいの。

私も知りたいな。優太君はおじいちゃんの友達だから。

俺と兄さんは、血が繋がってない。親が再婚同士だったんだ。俺の母親と、

兄さんの父親と。

再婚したのはいつ？

十二年前だよ。

その時、あなたたちは幾つだったの？

優太
かさね
優太
かさね
理衣
優太
かさね
優太
かさね
理衣
優太
かさね
理衣
優太
かさね
理衣
優太
かさね

優太 俺が六つで、兄さんが十八。でも、再婚してすぐに、兄さんの父親が交通事故に遇って。

かさね 亡くなったの？

優太 (頷いて) それから二年後に、母さんが、違う人と結婚することになって。

理衣 たったの二年で？

かさね じゃ、その、違う人と四人で暮らしたの？

優太 兄さんがイヤだって。もともと、兄さんと母さんは、気が合わなかったんだ。

かさね お兄さんが出ていったの？

優太 俺と一緒に。兄さんが母さんに言ったんだ。優太の面倒は俺が見る。大学をやめて働くって。

理衣 待って。優太君は幾つだったの？

優太 八つだよ。

理衣 まさか、お母さんはそれでいいなんて。

優太 言ったよ。そうしてくれると助かるって。

理衣 信じられない。それでも母親？

かさね いるんだよ、そういう人も。子供より、自分のやりたいことを優先する親。よくある話じゃない。

優太 (優太に) それで？ お兄さんとは、いつまで一緒にいたの？

理衣 一年前まで。何も言わずに、いきなりいなくなったんだ。

優太 どうしてだろう。

理衣 俺の面倒が見きれなくなったんだ。兄さんが働いてた会社が潰れて、給料も

半分しかもらえなくて。家賃も俺の学費も払えなくなったから。

理衣 だからって、優太君を置いていくなんて。

かさね 優太 理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね 理衣 優太 かさね

（優太に）お兄さんを探そうとは思わなかったの？
探しようがなかったんだ。携帯も繋がらなくなってたし。兄さんは、俺と縁を切りたかったんだ。だったら俺もそうしてやろうって。
だから嘘をついたの？ これから夜勤だなんて。

（頷く）

あなたがお兄さんを避けたい気持ちはわかった。でも、お兄さんは反省して
るんじゃないかな。だから、あなたを探したんじゃないの？ やっぱり、あ
なたを放っておけないと思つて。

勝手な人だね。

（優太に）明日、じっくり話し合ってみたら？ これからどうするのか。
どうするって。

あなたの生活のこととか、進学のこととか。お兄さんの意見も聞いて――――
他人のことなら、簡単に許せるんだな。

え？

颯介のことは、絶対に許さないって思ってるくせに。

どうしてあの人が出てくるの？ それとこれとは、話が違うでしょう。

ストップ。今日はここまでにしよう。これ以上話しても喧嘩になるだけ。

私だって、喧嘩なんかしたくないよ。

優太君はまだ、気持ちの整理がついてないんだよ。一晩置けば、お兄さんと
も、落ち着いて話せるんじゃないかな。そうだよ、優太君。

……

明日の朝、お兄さんに電話してあげて。心配してると思うから。
（優太に）そう言えば、さっき、お兄さん、変なこと言つてなかった？

かさね

変なこと？

理衣

食堂がどうかかって。(優太に) あれってどういう意味？

優太

さあ。

理衣

さあって。

優太

勘違いしたのかもしれない。あそこに親戚がいるって。

かさね

じゃ、そろそろ帰ろうか。

理衣

え？ まだ荷物の整理が終わってないよ。

かさね

また来るよ、もちろん。でも、二日も泊まるつもりじゃなかったし。

理衣

(時計を見て) かさねちゃん。残念なお知らせがあるんだけど。

かさね

何。

理衣

三分前に、終電が出ました。

かさね

嘘でしょう？ まだ十時だよ。

理衣

ここは東京じゃないんだよ。大丈夫。多めに食材を買っておいたから。

かさね

そういう問題？

理衣

何か作ってくるね。優太君、手伝ってくれる？

理衣がコーヒークップを持って去る。優太も去る。

かさね

また目玉焼き？ 冗談じゃない。

二人を追って、かさねが去る。

七月四日朝、颯介宅。拓己がやってくる。ポストンバッグを持っていく。窓から中を覗く。かさねがやってくる。拓己を見て驚く。拓己が頭を下げる。かさねが窓を開ける。

拓己 突然すみません。一宮拓己と申します。

かさね はあ。

拓己 いいお宅ですね。ちょっと古いけど、よく手入れしてあって。

かさね 大丈夫です、リフォームの予定はありませんので。

拓己 いや、そうじゃなくて。

かさね 一宮？ 優太君のお兄さんですか？ ごめんなさい、いつも下の名前で呼んでるから。どうぞお入りください。

拓己 お邪魔します。

拓己が中に入る。二人が椅子に座る。

拓己 そうですか。優太は、あなたのお父さんにお世話になってたんですか。

かさね 大したことはしてないと思います。せいぜい、絵を教えるぐらいで。

拓己 いや、あいつには、そういうことが必要だったんです。二人で暮らしてた頃は、絵を描く余裕なんかありませんでしたから。

かさね

優太君は、素晴らしい絵を描きますよ。本人がその気になれば、絵で食べていくことも可能だと思います。

拓己

それはちよつと褒め過ぎじゃないですか？

かさね

いいえ、率直な感想です。でも、優太君はまだ、本格的な教育を受けてない。できれば、美大へ進学することをお勧めします。

拓己

でも、美大はお金がかかります。成績さえよければ、まったくお金のからない奨学金という手があります。成績さえよければ、まったくお金のからない

拓己

優太が行きたいと思うなら、俺に文句はありません。あいつには、好きなことをやってほしいと思ってます。今まで苦勞をかけた分も。

そこへ、理衣と優太がやってくる。それぞれ、スーパーなどから調達してきた段ボール箱を持っている。

優太

兄さん。なんで。電話が来ないから、押しかけてきた。

拓己

なんでここがわかったんだ？俺たちの後をつけたのか？

優太

（理衣を示して）おまえがちゃんと彼女を送っていかどうか、気になつてな。まさか、一緒に暮らしてるとは思わなかったから。

理衣

それ、全然違います。誤解して悪かった。優太とは、二日前に会ったばかりなんだってね。

拓己

何の話をしてんだ。どうしてあなたが住んでるのか、説明してたの。

優太

この家のこと。どうしてあなたが住んでるのか、説明してたの。

かさね

拓己
かさね

理衣
拓己

かさね

理衣

優太

理衣

拓己

優太

拓己

理衣
拓己

かさね

拓己

理衣

（優太に）絵の話も聞いたぞ。死んでも美大に行かせろって脅された。

脅してなんかいません。お願いしたんです。

（拓己に）それより、お兄さんに質問があるんですが。

何だい？

どうして優太君を置いていったんですか？ 黙って出ていくなんて、非常識

だと思わなかったんですか？

ちよつと、理衣。

大事なことから。最初に聞いておかないと。

いいよ、別に。俺はもう怒ってないから。

そういうわけにはいかないよ。

すまない、優太。おまえを一人にするつもりはなかったんだ。

いいんだって。

聞いてくれ。あの時はどうしようもなかった。おまえに連絡したくても、で

きない事情があったんだよ。

何があつたんですか？ ちゃんと説明してください。

一年前まで、俺たちは川崎に住んだ。でも、突然、俺が札幌へ行くことに

なつてね。高校時代の先輩から、面接に來いって連絡があつて。

面接つて、仕事のですか。

いい加減、ちゃんとした職に就きたくて。思いつく限りの知り合いに相談し

たんです。相手にしてくれたのは、その先輩だけ。先輩は、札幌で運送会社

をやつてまして。今すぐ来るなら、正社員にしてやると言われたんです。あ

まりに急な話だったから、書き置きもできなくて。

でも、電話ぐらいは。

拓己　それが、フェリーの中で、体調を崩してね。倒れた拍子に、携帯が壊れたんだ。

理衣　本当ですか？

拓己　本当だよ。倒れたのがトイレの中だったんだ。携帯は見事に水没。

拓己　それで。

病院に運び込まれて、十日ぐらい、意識が朦朧とした状態が続きました。医者の話では、肺炎を起こしてたそうです。やっと先輩に頼んで、電報を打つた時には、優太は部屋を追い出された後でした。

拓己　追い出された？

拓己　俺が札幌に行ったのが、家賃の支払い日だったんですよ。もちろん、振り込

む用意はしてたんですが、間に合わなかった。実は前にも、何度か、遅れたことがありまして。次は出ていってもらおうと言われてたんです。

拓己　じゃ、すぐ東京に戻ったんですか？

理衣　いや。そうしなかったけど、先立つものがなくてね。優太と連絡を取ろうにも、方法がなかった。金を貯めるのが先だと思っただ。戻ってきたのは、

拓己　一月前。一月かかって、やっとここに辿り着いたんだ。

理衣　会社は？ 辞めたんですか？

拓己　休職扱いにしてもらってる。(優太に) 情けない兄ですまん。おまえさえよ

拓己　かったら、一緒に札幌で暮らそう。

拓己　そんなこと、急に言われても。

拓己　許せないのか、俺のことが。

拓己　違うよ。この片付けもあるし、仕事だっただけには辞められないし。それもそうだな。ゆっくり考えてくれ。おまえが美大に行きたいなら、それ

優太

でもいい。待ってるから。
わかった。

拓己

(かさねに)お邪魔しました。

かさね

もう行っちゃうんですか？　もう少し、話をしていけば。

拓己

言いたいことは、全部、言いました。そろそろ札幌に戻らないと。

拓己が優太に歩み寄る。肩を抱く。優太の耳元に、何か囁く。

拓己

(かさねと理衣に)それじゃ。お二人とも、お元気で。

拓己が去る。

かさね

(優太に)お兄さん、何だって？

優太

え？

かさね

今、何か言ってたでしょう。

優太

悪かったって。

かさね

そう。

理衣

かさねちゃん、変だと思わない？　お兄さんの話。

かさね

どこが。

理衣

最初から。いくら急でも、書き置きぐらいできたはずでしょう。

かさね

後で電話するつもりだったのに、できなかつたんでしょ？

理衣

でも、都合が良すぎない？　フェリーで倒れたとか、携帯が壊れたとか。

かさね

私たちが口出しすることじゃないよ。お兄さんは、優太君を探しに来た。ち

理衣 かさね
優太 かさね
かさね
優太 かさね
かさね
優太 かさね
かさね
理衣 かさね
かさね
優太 かさね
かさね
理衣 優太
優太 理衣
優太 かさね
かさね

やんと謝った。それでいいじゃない。

そう言われればそうだけ。

つべこべ言っていないで、働こう。その段ボール、組み立てて。物置の絵を、

片っ端から詰め込むの。

俺、まだ欲しいヤツが決まってない。

だったら、詰め込みながら決めて。

絵は最後でいいだろう。俺が一人でやるから。

じゃ、私が先に決めていい？ 何枚か目をつけてあるんだ。

駄目だ。

そう言うだろうと思った。かさねちゃん？ 優太君の後でいいの？

言っただろ。なかつたつけ？ 私は知らない。

一枚も？

そう。一枚も。

颯介の絵をどうするつもりだ？

専門の業者に送るの。絵なら、何でも引き取ってくれるところに。ほとんど

処分されると思うけど。

颯介の絵はゴミじゃない。

似たようなものでしょう？ 売れないってことは、価値がないってことよ。

誰が決めたんだ、そんなこと。

決めたんじゃない。決まってるの。作品が出来上がった瞬間に。

何だよ、それ。

あなたにはわかるはずよ。私が何を言ってるのか。

わかるわけないだろう。

かさね 比べてみなさいよ。あなたの絵と、あの人の絵を。

かさねが肖像画を取り上げて、優太に突き出す。

かさね 本当は気付いてるんでしょ？ 自分には才能があるって。
優太 (肖像画を奪って) こんな絵、どうでもいい。

優太が肖像画を床に叩きつけようとして振り上げる。

理衣 優太君！

かさね やめて！

優太 (止まる)

かさね やめて。あなただけの絵じゃないんだから。

優太 (手を下ろして) あんた、やっぱり颯介の娘なんだな。

かさね え？

優太 颯介も同じことを言ってた。半年前。

一月四日夜、颯介宅。颯介がやってくる。マグカップを二つ持っている。

颯介 (カップを差し出して) 俺の特製ココアだ。温まるぞ。

優太 (受け取って) 特製？

颯介 ほんのちよつと、バターを入れるんだ。そうするとコクが出る。(自分のカップを示して) こっちは大人用。ブランドーがたっぷり入ってる。

優太 颯介 優太 颯介

優太 颯介 優太 颯介

優太 颯介 優太 颯介

理衣 かさね 優太 颯介 優太 颯介

（飲んで）うまい。
（飲んで）しまった。そっちが大人用だ。取り替える。

いいよ、別に。
まあいいか。（肖像画を示して）なんで壊そうとした？ せっかく描いたの

に。
足りないんだ。色が。色？

思ってたのと違うんだ。描きたかったのと。

それで痲癩を起こしたのか。気持ちにはわかるが、作品に当たるのはよくない。
気に入らなければ、描き直せばいいんだ。油絵はいくらでも色を重ねられる。
焦ることはない。

描いても描いても、気に入らなかつたら？
それでも描くんだけ。納得が行くまで。

面倒なんだな。絵を描くって。

ああ。手間をかけたからと言って、いい絵になるとは限らない。思い通りに
描けることの方が少ない。いっそのこと、やめちまおうと思うことだってあ
る。それでも、描くことはやめられない。生きていくのと同じだな。

カツコつけちゃって。
ホントにね。

颯介。

何だ。
いい絵って、どんな絵だ？ どうやったら描けるんだ？
永遠の謎だな、それは。

優太
颯介

はぐらかすなよ。颯介にはわかってるんだろう？
そうだな。俺に言えるのは、いい絵は、描き手だけのものじゃないってことだ。いい絵は、誰かに見られるのを待っている。見られると同時に、その誰かのものになるために。金で買われるってことじゃないぞ。絵に触れて感じた何かが、その人の宝物になるってことだ。描き手の予想もつかない、特別なものに。それができるのが、いい絵なんだ。わかるか。

優太

(首を捻る)

颯介

とにかく、君の絵は、君だけのものじゃないってことだ。まあいい。また話

優太

同じ物を。(優太のカップを示して) もう一杯、どうだ。

颯介

駄目だ。今度はバター入りにしろ。

颯介が優太からカップを受け取って、去る。

理衣
かさね

私、飲んだことある。バター入りのココア。そう。

理衣
かさね

受験の時、お母さんが作ってくれた。あれ、おじいちゃんの特製だったんだ。偶然かもしれないよ。よくある飲み方だから。

理衣

でも。

かさね

優太君。そろそろ仕事に行く時間じゃないの？

優太

あんた、腰は大丈夫なのか。

かさね

え？

優太

痛いって言ってただろう。ものすごく。

かさね ああ。うん。もう何ともない。
優太 だったらいけど。行ってくる。

優太が去る。理衣がかさねを見つめる。

かさね 何よ。

理衣 ううん、別に。いつの間に治ったのかなと思って。
かさね いいから、働いて。

かさねと理衣が去る。

七月四日夕、港近くの食堂。優太がやってくる。周囲を見回す。拓己がやってくる。

拓己
遅かったじゃないか。
ごめん。

拓己
なんで今朝、電話してこなかった？ そんなに俺と会いたくなかったのか？
拓己
どうしていいかわからなかったんだ。俺、ひどいことしたから。

優太
ひどいこと？
拓己
兄さんを見捨てて逃げたんだ。兄さんがパトカーに乗せられるところも見てたのに。

拓己
おまえ、あそこにいたのか？ アパートで待ってろって言っただろう。
優太
イヤな予感があったんだ。何か見落としてるような気がして。

拓己
確かに。おまえの見取り図には穴があった。ブランドものの時計が入ってたケースに、もう一つ、警報装置があったんだ。

優太
もう一つ？
拓己
ガラスを割ると同時に装置が作動した。俺が念を入れるべきだった。個人経営の店だと思って、甘く見た。おまえに限って、見落としは有り得ないと思

優太
い込んでたしな。
拓己
なんですぐに逃げなかったんだよ。

拓己

手ぶらで逃げてたまるか。警報が鳴ったぐらいで警察が来るとは思えなかつたしな。ところが、音を聞いた隣の住人が通報しやがったんだ。裁判の時に聞かされた。

優太
拓己

裁判？

時計屋の件だけなら未遂で済んだがな。アパートでキヤツシユカードが見つかっちゃった。大家のババアから盗んだヤツ。拾ったんだって言い張ったけどよ。余罪をあれこれ追求されて、十カ月もかかっちゃった。結局、執行猶予で済んだけどな。

どれぐらい。

三年だ。三年おとなしくしてりや、前科はつかない。

俺のことは言わなかったの。

なんで言う必要がある？

でも、聞かれたんじゃないの？ 共犯なんじゃないかって。

安心しろ。俺一人でやったってことになってる。おまえの役割がわかるヤツ

なんて、いやしないんだから。

ごめん。

それにしても、意外だったな。勝浦でグズグズしてたとは。初対面のジジ

いんにち居座るなんて、おまえにしちゃ、思い切ったじゃないか。

他に行く所がなかったから。

おまえ、ジジイに絵を習ってたんだって？ 優雅なもんだな。

成り行きだったんだ。

おまえの絵も見たぞ。あれ、おまえのお袋だよな。

(俯く)

拓己

俺はな。ああいう、親切の押し売りをしてくるヤツが大嫌いなんだよ。口ではうまいこと言いながら、心の底じゃ、俺たちを見下してる。自分は大した苦勞もしてないくせにな。苦勞つてのがどういうものか、思い知らせてやりたくなるんだよ。

優太
拓己

ビルの一階に釣り具屋がある。結構、大きい店で、問屋も兼ねてるんだ。そうか。

優太

ちよつと待ってくれ。今、見取り図を描くよ。

拓己

その必要はない。(優太の頭を示して) 見取り図はここにあるんだからな。

優太

完璧な見取り図が。

拓己

どういうこと。

優太

鈍いやつだな。おまえも一緒にやるんだよ。

拓己

……

拓己

これからは、ずっと二人でやっていくんだ。もうおまえを一人にはしない。

優太

俺たちは死ぬまで家族なんだから。そうだろ？
そうだね。

拓己が優太の肩を抱く。二人が去る。

七月四日夕、颯介宅。かさねと理衣が重ねた本を運んでくる。

かさね

あんた、これ全部、持って帰るつもり？

理衣

そんなの無理だよ。宅急便で送る。

かさね

お金がもつたいなと思わないの？ 本なんか、大学の図書館にいくらでも

あるでしょう。

理衣

私は別に、本が欲しいわけじゃない。おじいちゃんから受け継いだっていう事実が大事なの。

かさね

そんなもの、私は欲しくないけどね。

理衣

ねえ、かさねちゃん。絵を描いてて、辛いつて思ったことある？

かさね

どうしてそんなこと聞くの。

理衣

私ね、作家になりたいと思ってたんだ。小説読むのが好きだから。

かさね

へえ。

理衣

一応、文芸サークルにも入ってて、短い小説を何本か書いた。でも、読み直す

かさね

すと、なんか違うって思うんだ。私、こんなのが書きたかったんだっけって。

理衣

この前、サークルの友達が、文芸誌の新人賞で、最終選考まで残ったの。で、

かさね

ちゃんと担当の編集さんがつくことになったんだって。なんか、がっかりし

かさね

ちゃった。その子には、きつと、追いつけないんだろうなと思って。

理衣

それで？

かさね

それで、かさねちゃんの部屋に行ったの。話が聞きたくて。

理衣

そうだったんだ。

かさね

かさねちゃんならどうする？ 好きだったことが辛くなった時。

そこへ、優太がやってくる。バッグを持っている。

理衣

お帰りなさい。優太君の分も、夕ご飯、できてるよ。

優太

俺はいい。着替えを取りに来ただけだから。

理衣

また出かけるの？

優太 俺、兄さんと一緒に行くことにした。荷物整理の残りは、あんただけで

やってくれ。

かさね どうしたの、急に。何かあったの？

優太 別に。どうせ行くなら、早い方がいいと思って。

理衣 でも、もう七時だよ。今から札幌になんて行けるの？

優太 とりあえず東京まで行く。明日の朝、一番の飛行機に乗る。

理衣 だったら、明日でもいいじゃない。

優太 俺がどうしようと、俺の勝手だろう。

理衣 優太君。

優太が去る。

理衣 何、今の言い方。絶対、変だよ、優太君。

かさね そう？ いつもあんな感じじゃない。

理衣 それは、かさねちゃん、優太君を怒らせるようなこと言うから。

かさね それは否定できないけど。

優太が戻ってくる。バッグをもう一つ持っている。

理衣 本当に行っちゃうの？

優太 (出ていこうとする)

かさね 待って、優太君。ちよっただけ話を聞いて。

優太 いいよ、あんたの話は。

かさね
優太
かさね

お願い、ちょっとだけだから。大事なことなの。
何だよ。

あなたの絵のこと。うまく伝えられなかったけど、あなたの才能は本物だと思う。あの人がだつて、それを認めたから、あなたに絵を教えたの。だから、描き続けてほしい。絵だけはやめないでほしいのよ。

優太

大きなお世話だ。

かさね

私は本気で言ってるの。あの人が生きてたら、きっと同じことを言うと思う。

理衣

私も賛成。

優太

バカだな、あんたたち。

かさね

え？
俺はあんたたちに嘘をついてた。そんなヤツのことなんか、気にしなくていいんだよ。

優太

嘘って何？

かさね

お兄さんがいたってこと？

優太

俺がこの家に来た理由だよ。親戚がいたっていうのは嘘なんだ。

かさね

そうなの？　じゃ、どうして？

優太

昨日、兄さんが言ってた、港のそばの食堂。あそこが、俺の母親の実家だつたんだ。

理衣

お母さんの？

優太

俺は一度も行ってない。母親は、高校を出てすぐ、水商売を始めて。俺の父

かさね

親も、ロクな男じゃなかった。それで、実家とは絶縁状態だったんだ。でも、

かさね

俺が子供の頃、一度だけ、ばあちゃんから手紙が来た。俺は封筒に書いてあ

かさね

った住所を覚えた。

かさね

それはいつ？

優太 優太 優太 優太 優太 優太 優太 優太 優太 優太
かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね
理衣 理衣 理衣 理衣 理衣 理衣 理衣 理衣 理衣 理衣
かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね かさね

俺が三つの時。

そんな小さい頃に見たものを覚えてたの？

俺は、一度見たものは忘れない。覚えようと思って見たものなら。

そうか。だから、子供の頃に見た景色の絵が描けたんだ。

優太君は、おじいさんにも、おばあさんにも、会ったことがないの？

その食堂、今は誰も住んでないみたいだった。

（優太に）大網さんに聞いてみたら？ どこに引っ越したのか、知ってるか

もしれないよ。

前に聞いた。引っ越したんじゃない。二人とも死んだんだ。十年以上前に。

そう。

それで？ この家に来たのはどうして？

金が欲しかったんだ。

え？

（かさねに）あんたが言った通りだよ。俺は盗みに入ったんだ。

嘘でしょう？

部屋を追い出されてから、一週間、あちこちで野宿した。公園とか、橋の下

とか。持ってた金は五千円。勝浦に来るうちになくなった。最後の三日は、

水しか飲んでなかった。

だから、あの人の作った料理を食べたのね。死ぬほどお腹が空いてたから。

でも、結局、何も盗んでないんでしょう？ だったらいじやない。

待って、理衣。（優太に）他にも何か、隠してることがあるの？

かさねちゃん。

（優太に）どうなの、優太君。

優太

理衣

優太

かさね

優太

かさね

理衣

優太

理衣

優太

もうないよ。そろそろ行く。

おじいちゃんの絵はどうするの？ 欲しいものがあつたんでしよう？

颯介の絵は、全部覚えてる。それだけで十分だ。

あなたの絵は？ 置いていくの？

俺には必要ない。さようなら。

さようなら。

(優太に) 待って。駅まで送ってく。

来るな！

優太君。

来なくていい。荷物整理、最後まで手伝えなくてごめん。

優太が去る。

理衣

かさね

理衣

かさね

どうしよう、かさねちゃん。このまま行かせていいのかな。

本人が行きたいって言うんだから、しようがないじゃない。

でも。

いいから続きをやろう。また終電がなくなるよ。

かさねと理衣が去る。

七月四日夜、路上。警報装置の警告音。優太が走ってくる。立ち止まる。振り返る。遠くからパトカーのサイレンの音。優太が踵を返して走り去る。サイレンの音が消える。颯介宅。理衣がやってくる。スケッチブックを持っている。開いて、見る。かさねがやってくる。

かさね

何やってるの。

理衣

物置で見つけた。これ、優太君が最初に描いた絵じゃないかな。

かさね

私は掃除をしてって言ったはずだけど。

理衣

明日でもいいでしょう？ どうせ、今日は帰れないんだし。

かさね

誰のせいなの。あんたがグズグズしてるから。

理衣

(絵を見て) 見て、この桜。春の真ん中にあるって感じがしない？

そこへ、拓己が飛び込む。

拓己

優太はどこだ？

理衣

お兄さん？ どうして？

拓己

(理衣に歩み寄って) 優太は。ここに帰ってきただろう。

かさね

出ていったきりですよ。あなたと一緒に行くって。

拓己
かさね
拓己
理衣

（理衣の腕を掴んで）本当か？
本当です。どうして疑うんですか。
あんたなら、喜んであいつを庇うはずだ。
庇うって？

そこへ、優太が飛び込む。

優太
理衣
拓己
優太
拓己

兄さん、何やってるんだ！ 放せよ！
優太君。
優太、こっちに来い。
その前に理衣を放せ。
俺はこっちに来いと言ってるんだ。

拓己が理衣を突き飛ばす。理衣が倒れる。優太が拓己につかみかかる。拓己がかわして、優太を殴る。優太が倒れる。拓己が倒れた優太をさらに殴ろうとする。

かさね
やめて！

かさねが拓己の腕をつかむ。拓己が振り払う。かさねがよろける。拓己がナイフを取り出して、かさねに向ける。

理衣
拓己

かさねちゃん！
（理衣と優太に）動くな。

かさね 拓己 優太 理衣 優太 理衣 拓己 かさね
かさね 拓己 優太 理衣 優太 理衣 拓己 かさね
かさね 拓己 優太 理衣 優太 理衣 拓己 かさね

ずつと？
あんたには想像もつかないだろうな。今日、食うものがないって暮らしは。それで優太君を巻き込んだんですか。俺がやるって言ったんだ。兄さんの役に立ちたかったから。何をしたの？
下見だよ。盗む場所の。俺には完璧な見取り図が描けるから。いつから？ いつからそうやって暮らしてきたの？
俺が小四の時から。
（拓己に）恥ずかしくないですか？ 子供にそんなことさせるなんて。じゃ、何だ？ 二人で飢え死にすりゃよかったのか？
一度でも真面目に働こうとは思わなかったんですか？
思ったさ、最初は。だがな、クズみたいな会社に入るので精一杯だったよ。おまけに仕事先で、どこかのクズに車の中を荒らされた。会社の売り上げと一緒に俺の金も盗まれた。しかも会社は、俺を疑いやがった。どうせ前にもやっつてんだろう、被害届は出さないから金を返せってな。
それを受け入れたんですか。
会社の弁護士に言われたよ。訴えても俺に勝ち目はないってな。クビを切られて借金だけが残った。働いても利息しか返せなくて、また借金。その繰り返しで、どんどん追い詰められて。
自分が被害に遇ったから、盗みをしてもいいと思っただけですか。
なるほど。そういう考え方もあるな。
ふざけないでください。あなたにどんな事情があったとしても、優太君を巻き込む理由にはならないはずだ。

優太 兄さんだけなら、盗みなんかしなくてもやっていけた。でも、兄さんには俺

がいた。俺を食わせるためだったんだ。

それがわかって、俺を嵌めたのか。

嵌めるって。

一年前だよ。おまえ、わざと間違った見取り図を描いたんだろ。

……

拓己 どんな気分だった。自分のせいで、俺がとつ捕まるのを見て。正直に言って

みる！

悪いと思つたよ。でも。

でも、何だ。

同じぐらい、ホツとした。これでもう、見取り図を描かなくて済むって。

寝惚けたこと言うなよ。やるって言い出したのはおまえだろうが。

優太 最初は嬉しかったんだ。店の中を描くだけで、兄さんが褒めてくれたから。

でも、だんだん苦しくなってきたんだ。いつまでこんなこと続けるのかって。

拓己 だから裏切ったのか。

そうだよ。一人になりたかったんだ。もっと違う生き方を探したかったんだ。

優太 俺はどうなる。誰のせいでもんな生き方をしてきたと思ってるんだ。

拓己 あなたがどうやって生きるか、選んだのはあなたじゃないんですか。優太君

だけに責任を押しつけるのはやめてください。

偉そうな口を叩くな。

拓己

かさね

拓己がかさねの胸ぐらを掴む。優太が拓己の手を掴み、引き剥がす。拓己が優太の手を振り払う。優太がよろける。拓己が優太にナイフを向ける。

優太 拓己 優太 拓己 優太 拓己 優太 拓己 優太 拓己

わせてやっていけばいいじゃないか。
俺も一度はそう思った。やっぱり兄さんと生きていこうって。

だったら————
でも駄目なんだ。颯介の声が、頭から離れないんだ。

声？

颯介は、俺に絵を描けって言った。描くべきだって。

絵が何の役に立つ。絵だけで食っていけるのか。

颯介は、売れる売れないは関係ないって言った。ただ、描きたいから描くん
だって。

どういう意味だ。

俺にもよくわからなかった。でも、もう一度、兄さんについていくって決めた時、やっと気付いたんだ。好きなものを好きなように描くことが、俺にと
ってどれだけ大事か。もし、それができなくなったら、息がでないのと同じ
じなんだ。描きたいんだよ。俺にしか描けない、俺だけの絵。そんな絵が、
描けるようになりたいんだ。

おまえには、何もわかっちゃいない。好きなことだけやって生きていけると
思ったら大間違いだぞ。

言っただろう。ちゃんと働く。兄さんがやってたみたいに。
そうか。(優太の右手を取って) なあ。今、おまえの右手を刺したらどうす

る。二度と動かせないぐらい。

左手で描くよ。描けるようになるまで諦めない。
勝手にしろ。

拓己が歩き出す。

優太 兄さん、待って。

優太が、理衣の持ってきたスケッチブックから、絵を一枚破り取る。拓己に差し出す。

優太 俺がここにきて、最初に描いた絵。兄さんに持っていてほしいんだ。

拓己 (見て) 冗談はよせ。

拓己が去る。

理衣 いいの？ 追いかけて。

優太 ああ。

かさね (絵を示して) その絵、どこの景色なの？

理衣 子供の頃、家族でピクニックに行った場所。どこだったかは忘れたけど。

優太 お兄さん、覚えてないのかな。

理衣 いいんだ。それより、なんでまだいるんだ？ 終電はとっくに出ただろう。

かさね 優太君が帰ってくるんじゃないかと思って。

理衣 そうだったの？

優太 かさねちゃんだって、グズグズしてたくせに。

かさね (かさねに) 読んだか、日記。

優太 え？

かさね 日記だよ、颯介の。

かさね　ああ、うん。帰ってから読む。
理衣　まだ読んでなかったの？
優太　（かさねに）無理に読めとは言わない。でも、表紙の裏だけは見るよ。
理衣　表紙の裏？　気になる。かさねちゃん、今、見てよ。一生のお願い。

かさねが鞆から日記を取り出す。表紙を開く。

理衣　何？　何を書いてあったの？
かさね　自分で見れば。（差し出す）
理衣　いいの？　（見て）写真？　このセーラー服の子、もしかしてお母さん？
かさね　姉さんの入学式。中学校の。
理衣　おばあちゃん、若い。かさねちゃん、小さい。よくこんなに育ったね。
かさね　放つといて。
理衣　なんで三人だけなの？　おじいちゃんは？
かさね　写ってるわけないよ。あの人が撮ったんだから。
理衣　なるほどね。（日記をめくって）うわ。毎日書いてある。毎日だよ。おじいちゃん、きつと毎日、この写真を見てたんだね。
かさね　だから？　毎日見てたら何だって言うの。
理衣　何って。
優太　（理衣の手から日記を取り上げて）俺も同じことを聞いた。颯介に。

五月四日夕、颯介宅。颯介がやってくる。

優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介 優太 颯介

あまりいい趣味とは言えないな。他人の日記を読むなんて。置きっぱなしになってたから。

せめて読む前に一言、断るべきじゃないのか。どうせ駄目だって言うんだろ。

今はな。俺がいなくなったら、好きにすればいい。(日記を取る) なくなるとって？

今日、病院に行ってきた。近いうちに入院することになると思う。どこか悪いのか。

年を取ると、あちこちガタが来るんだ。やりたいことは、若いうちにやっておけ。今言われても、ピンと来ないだろうが。(日記を机に置く)

(日記を示して) その写真は？ 颯介の家族か？ そうだ。

なんで一緒にいないんだ？ やりたいことじゃなかったからか？ 俺は家族より、絵を描くことを選んだ。それだけだ。

じゃ、なんで写真なんか持つてるんだよ。その前に教えてくれないか。君はなぜ、お母さんの絵を描いた？

なんでわかった。わかるさ。目元が君にそっくりじゃないか。

別に理由なんかない。他に描くものがないから。俺も同じだ。理由なんかない。持っていたいから持つてるんだ。

ずるいよ。そうだな。でも、正直な気持ちだ。会えないから描いた。

颯介
優太

ん？

多分、母さんにはもう会えない。でも、描いてる間は、そばにいるような気がしたんだ。

颯介

ああ。よくわかる。

優太

なんで颯介は描かないんだ？ 家族の絵。

颯介

俺は、今の家族を知らない。知らないものは描けないんだ。

優太

知りたいてって思わないのか。

颯介

そんなことを思う資格は、俺にはない。

優太

どうして。

颯介

どうしてもだ。ただ。

優太

ただ？

颯介

実緒子とかさね。二人の娘に出会えたことは、俺の人生、最高の喜びだ。

理衣

かさねちゃん、聞いた？

かさね

聞いてるよ。

颯介

優太。俺は君に絵を描くべきだと言ったな。でも、続けるかどうかは君の自由だ。君の人生は君のものだ。どう生きていくかは、君が自分で決めるんだ。

颯介が去る。

優太

それからすぐ、颯介は入院した。俺は毎日、見舞いに行った。

かさね

最後まで付き添ってくれたの。

優太

当たり前じゃないか。

かさね

ありがとう。

優太
かさね
理衣

（礼なんかいらぬ。俺はやりたぬことをやっただけだ。（日記を差し出す）
（日記を受け取る。表紙を開く。読み始める）
私、お茶淹れてくるね。

理衣が去る。かさねは日記を読む。優太がスケッチブックを手取る。読んでいるかさねのスケッチを始める。

七月五日朝、颯介宅。かさねが日記を読んでいる。優太はスケッチブックに顔を伏せて眠っている。理衣がやってくる。

理衣　びっくりした。
かさね　おはよう。
理衣　かさねちゃん、一晩中、起きてたの？
かさね　まあね。
理衣　どうだった、おじいちゃんの日記。かさねちゃんのこと、何か書いてあった？
かさね　ううん。姉さんのことも、お母さんのことも、一言も。
理衣　本当に？
かさね　ただ、その日にあったことが書いてあるだけ。
理衣　何だ、つまんない。
かさね　でも、読みごたえはあったよ。絵画教室で教えてた子供のこととか、かなり詳しく書いてあって。
理衣　優太君のこと？
かさね　もちろん。何よ。あんた、もしかして、優太君のこと。
理衣　誤解しないで。私、年下は趣味じゃない。

優太が顔を上げる。

優太 俺のことは。

理衣 え？

優太 (かさねに) 颯介は俺のこと、何て書いてた。

理衣 起きてたの？

かさね (優太に) 知りたかったら、自分で読めば。(日記を差し出す)

優太 ゆっくり読んでる時間がないんだ。俺、やりたいことがあるから。

理衣 何？

優太 最初に、大網さんに会いに行く。昨夜のことを話して、謝りたいんだ。

理衣 大網さんなら、許してくれるんじゃないかな。結局、優太君は何もしてないんだし。

優太 それから、警察に行つて、今までのことを全部話す。ちゃんと罰を受ける。

かさね やり直すのは、それからじゃないと。

かさね そうね。私もそう思う。

理衣 (優太に) でも、まだ仕上げてない絵がいっぱいあるでしょう？ あれはどうするの？

優太 悪いけど、全部、捨ててほしい。絵はまた描けるから。

理衣 そんな。

かさね (優太に) 三十枚ぐらいなら、私の家で預かれるよ。

理衣 私も、十枚ぐらいなら。

優太 俺の絵はいいんだ。それより、颯介の絵を持っていってくれよ。

かさね わかった。

優太 教えてくれよ。颯介が書いたこと。
かさね じゃ、最後の日記だけ読んでいけば？
優太 最後？
かさね 入院する前の日。あなたのことが書いてあるから。（日記を差し出す）

優太が日記を受け取る。開く。黙読。

理衣
優太

私にも聞かせてよ。
「五月十日。曇。この日記は家に置いていくつもりだ。病院のことを書くのはどうも気が進まない。運良く帰ることができたなら、続きを書こうと思う」

遠くに颯介が現れる。

颯介

「今日は優太と海岸を歩いた。その後、どこかへ食事に行こうと誘ったが、優太は俺のオムライスとチャーハンが食いたいと言う。腕によりをかけて作る。優太の絵は、なかなか完成しない。焦るなと言った手前、催促はできないが、本音は一日でも早く、一枚でも多く、仕上がった絵を見たい。自分に焦るなと言いつつも聞かせる。優太は今、巣立ちを控えた若い鳥だ。放っておいても、やがて存分に翼を広げ、大空に飛び立つていくだろう。それを見届けることができなくても構わない。俺の代わりに優太の絵に触れる人々は、いくらでもいるのだから」

颯介が去る。優太が日記を閉じる。

理衣　かさね　優太　かさね　優太　かさね　優太　かさね　優太　かさね　かさね

おじいちゃん、最後までカッコつけちゃって。

これは家系じゃないからね。

頼みがあるんだけど。

何？

やっぱり、預かってくれないか。俺の絵。

了解。私の携帯、大綱さんが知ってるから。いつでも電話して。

あんたは大丈夫か。

何が？

絵だよ。やめたりしないよな。

当たり前じゃない。私には、続けることしかできないんだから。

私は、それだつてすごいと思うよ。続けたいって思うのと、本当に続けていくのとじゃ、全然違うもの。

俺もそう思う。

（かさねに）私も、続けていけるように頑張る。今、書きたいものがいっぱいあるんだ。

理衣も絵を描くのか。

私が書いてるのは小説。もうやめようかと思ってたけど、やっぱり、諦めな

いって決めた。

（頷く）

俺、行くよ。（かさねに日記を差し出して）

今度会った時は、あんたの絵が見たい。

優太君の絵もを見せて。

かさね

かさね

優太 (頷いて) そうだ、これ。昨夜、あんたに渡そうと思って描いたんだ。

優太がスケッチブックを取り上げ、かさねに差し出す。

優太 一番後ろの絵だ。後で見てください。

理衣 今じゃ駄目なの？

優太 女の人って、八割増しに描かないと怒るだろ。

かさね どういうこと？ 私を描いたの？

優太 それじゃ。

かさね またね。

優太 うん。また。

優太が去る。

理衣 (優太の背中に) 待ってるからね！ 会いに来てね！

かさねがスケッチブックを開く。見る。息を飲む。

理衣 どうだった？ キレイに描いてくれた？

かさね ……。

理衣 (見て) 何これ。かさねちゃんと、私と、この人は？

かさね お父さん。

理衣 え？

かさね
優太君、お父さんを描いてくれたの。私のために。

かさねが俯く。理衣がかさねの肩を抱く。理衣が絵を指して、何か言う。かさねが笑う。理衣も笑う。窓の外、太陽の光を反射して輝く。二人は優太の描いた絵を、いつまでも見つめている。

∧
幕
∨